

使徒の働き1章9－11節 「天に上られたイエス」

1A 雲の中に上げられた方 9

1B 神の認証

1C 神の受け入れる義

2C 聖霊の約束

2B 復活の後の即位

1C 復活にある御子の現れ

2C しばらくの間の着座

3C あらゆる名にまさる名

4C 執り成す方

3B 苦しみ後の栄光

1C ヨセフの生涯

2C 父への回帰

3C 主に連なる者たち

4B 聖徒たちの引き連れ

1C キリストにある着座

2C 天における座

3C 神の子たちの現れ

5B 栄光の雲

2A 同じ姿で戻られる方 10－11

1B すべての者の見る再臨

2B エルサレムの回復

本文

使徒の働き1章を開いてください。今晚は、9節から11節を見ていきます。「⁹こう言ってから、イエスは使徒たちが見ている間に上げられた。そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。¹⁰イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。¹¹そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

ルカによる、イエスの昇天の記録です。主が、よみがえられてから40日間、神の国について弟子たちに教え、聖霊が臨まれる約束を与え、それで天に上られました。福音書において、ルカは、イエスが弟子たちを祝福しながら上げられたことを記しています。「ルカ 24:50-51 **それからイエス**

は、弟子たちをベタニアの近くまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らから離れて行き、天に上げられた。」

本文から分かるのは、一つ、これが、はっきりと物理的に、目で見える形で認めることのできる出来事だったということです。ルカは、使徒たちが見ている間に上げられたと記しています。そして、雲がイエスを包み、彼らの目に見えなくなったと言っています。ここに比喩的表現は何一つありません。実際に、使徒たちの肉眼で確認できる形でイエスは、天に上げられました。これまで、主は四十日間、人々の間に現れては、その場から見えなくなりました。ご自身がよみがえられたことを見せていかれました。けれども今度は違います。弟子たちから確実に離れて、いなくなることを見せて、確認させたのです。

1A 雲の中に上げられた方 9

私は、長いこと、イエスの昇天について、それが物理的に起こったということ以外に、大きな意味や意義を見つけていませんでした。けれども、聖書を読んでいくうちに、だんだん、大きな意味や意義があることに気づいていきました。教会において、主が肉体を持って生まれたこと。主が、十字架につけられたこと。そして、よみがえられたことについては、その意味をしっかりと学びます。そして再び来られることも学びますね。けれども、主が天に上られたことについては、ただ上られたということ以上に、何の意味があるのかを、あまり学ばなかったと思います。それで、今晩はイエスの昇天について、じっくりと学ぶことができるので、とても楽しみにしています。

1B 神の認証

1C 神の受け入れる義

主が天に上がられることについて、ご自身が弟子たちに語られた言葉があります。「ヨハ 16:10 義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなるからです。」これは、イエスが天に上られるところに、父のもとに行きますが、そこに義が証しされているということです。主が、地上に遣わされ、肉体をもって現れ、そして十字架、復活まで、行われたかすかすのことを、父なる神が義とされているということです。

パウロもテモテへの第一の手紙で、「敬虔の奥義」として、次のことを書きました。「3:16 キリストは肉において現れ、霊において義とされ、御使いたちに見られ、諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」栄光のうちにあげられた、ということが最後でしめくくりとして出てきます。

2C 聖霊の約束

そして、主はご自身が天に上られたほうが、あなたがたによって良いのだと言われたことがあります。「ヨハ 16:7 しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたの益に

なるのです。去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はおいでになりません。でも、行けば、わたしはあなたがたのところに助け主を遣わします。」

弟子たちにとっては、主が共におられなくなるのですから、とてもさみしくなります。過越の食事の後の、主の話、ヨハネ 13 章から 17 章までは、ご自身が父のもとに上っていくことについて、残される弟子たちに慰めの約束を与えています。そこで、ご自身がいなくなることについて、もうひとりの助け主、聖霊を遣わすと約束されたのです。主は肉体にある時は、その周囲にいなければ接することができないという限界がありますが、聖霊が来られれば、物理的に限定されず、どんなところにも、主がおられるということで、彼らの益になるということです。

主が、天に上げられることによって、初めて聖霊の約束があるのです。ペテロも説教で、「2:33 ですから、神の右に上げられたイエスが、約束された聖霊を御父から受けて、今あなたがたが目にし、耳にしている聖霊を注いでくださったのです。」と言っています。天に上られたことによって、聖霊が注がれました。

2B 復活の後の即位

ところで、私たちが主が復活されて、神の国のことを語られましたが、復活が神の国の現れが始まったことについて、初回で学びました。

1C 復活にある御子の現れ

詩篇二篇には、こう預言されています。「2:7-9 「私は【主】の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまであなたの所有として。あなたは鉄の杖で彼らを牧し陶器師が器を砕くように粉々にする。』」」ここの「あなたを生んだ」という言葉は、赤ん坊として生んだということではなく、復活のことです。イエスが、よみがえりによって公に御子として現れたということです。そこに現れた栄光と力にあって、国々をゆずりとして父なる神から受け継ぐ、ということでもあります。

2C しばらくの間の着座

そして昇天は、よみがえられ御子として公に現れた方が、御国を受け継ぐまで、父の右の座に着いている時であります。詩篇 110 篇を読みます。「110:1-2 【主】は私の主に言われた。「あなたはわたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」「【主】はあなたの力の杖をシオンから伸ばされる。「あなたの敵のただ中で治めよ」と。」父が子に御国を任せると、右の座に着いていなさいということです。その一時的な状態が、右の座に着いている、ということです。

ペテロは、その一時的な姿をこう説明しています。「3:20-21 そうして、主の御前から回復の時に来て、あなたがたのためにあらかじめキリストとして定められていたイエスを、主は遣わして下さいます。21 このイエスは、神が昔からその聖なる預言者たちの口を通して語られた、万物が改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。」主が再臨される時に、万物が改まります。その時までには天に留まっていないといけない、と言っています。

3C あらゆる名にまさる名

主が、天に上られた時というのが、その即位式であり、あらゆる権威の上に父が子を置かれているのです。「エペ 1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」ピリピ 2 章にも、有名なみことばがありますね。主が、しもべの姿を取られて、十字架の死に至るまで忠実でした。そして 9 節です、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」

4C 執り成す方

そして、主イエスは神の右の座に着いていることによって、御子として父に、執り成しをすることができます。すぐ横におられる方にそのまま人々のために執り成すのです。「ロマ 8:34 だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」

3B 苦しみの後の栄光

ところで、主は、ご自身がよみがえるということも語られましたが、「栄光に入る」という言葉も使われました。「ルカ 24:26 キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったのではありませんか。」ここの栄光というのは、まさしく主ご自身が神ご自身の右の座に着くということです。天に上られる、ということです。

1C ヨセフの生涯

苦しみの後の栄光については、ヨセフの生涯が典型です。彼が兄たちに売られて、エジプトで奴隷となり、けれども、ファラオの前に連れて来られ、その夢を解き明かし、さらに飢饉から救われるための助言も行ったことによって、ファラオの次の権力者となりました。それと同じように、キリストは兄弟たちであるユダヤ人に捨てられましたが、よみがえり、天に上げられ、あらゆる名にまさる名を、父なる神からあたえられたのです。

2C 父への回帰

ところで、福音書は四つありますが、ヨハネによる福音書は独特です。書かれた時期が、紀元後

90年代であり、他の三つの福音書からかなり後に書かれました。そのためか、彼は、まだ語られていないイエスについてのことを、書くことを意識していたのかもしれませんが。主が復活するということを語られる以上に、ご自身が父のところに上ること、ご自分の父にある栄光に入るということを、初めのほうからずっと発言しておられたことを書き記しているのです。

例えば、仮庵の祭りの時期、祭司長たちとパリサイ人たちにこう言われました。「ヨハ 7:33 もう少しの間、わたしはあなたがたとともにいて、それから、わたしを遣わされた方のもとに行きます。」そして、最後の晩餐の後の会話は、ずっと、ご自分が去ることを語っておられます。「ヨハ 13:33 子どもたちよ、わたしはもう少しの間あなたがたとともにいます。あなたがたはわたしを捜すことになります。ユダヤ人たちに言ったように、今あなたがたにも言います。わたしが行くところに、あなたがたは来ることができません。」そして、よみがえられた後に、マグダラのマリアにこう言われているのです。「20:17a わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないのです。」主にとって天に上げられることは、ご自身が父のふところにいて持っていた栄光のところに戻るということです。ご自分の父のところにいくということです。

3C 主に連なる者たち

このような思いから、主はご自分の兄弟になった者たちも、連れてきたいと願っています。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」主ご自身が天に上られて、父のところに戻ったのと同じように、キリストの弟子たちも、天から降りて来られる主のところにまで引き上げられて、天で主にお会いするようにしてくださいます。ですから、イエスの昇天は、教会の携挙の希望につながっているのです。

4B 聖徒たちの引き連れ

こうして、主の昇天には、聖徒たちを天に引き連れていくという働きがあります。「エペ 4:7-10 しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました。8 そのため、こう言われています。「彼はいと高き所に上ったとき、捕虜を連れて行き、人々に贈り物を与えられた。」9 「上った」ということは、彼が低い所、つまり地上に降られたということではなくて何でしょうか。10 この降られた方ご自身は、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く上られた方でもあります。」主がよみがえられ、それから天に上られる時に、それまで陰府にいた者たちで、主を待ち望んでいる人々も連れて行かれます。マタイ 27 章に拠れば、イエス様がよみがえられた時に、聖徒たちが墓から出てきたことが書かれています(51-52 節)。そして、天に上られる時には、よみにいる人々を連れて行かれるのです。

そして賜物を与えます。それが、聖霊の賜物であり、教会に使徒、伝道者、預言者、牧師また教

師をお立てになります。

1C キリストにある着座

私たちは、たった今、霊的にキリストにあって天の座に着いている者たちです。「エペ 2:6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」

2C 天における座

そして事実、主が天から降りて来られたら、引き上げられ、天にある座が与えられます。「黙 3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせる。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

3C 神の子たちの現れ

そして、栄光の座に着かせられた私たちは、キリストが栄光の姿で地上に現れる時に、私たちも現れます。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」そして、これを「神の子の現れ」と、ロマ 8 章では書かれています。「8:19 被造物は切実な思いで、神の子どもたちが現れるのを待ち望んでいます。」

5B 栄光の雲

本文に戻りましょう。「そして雲がイエスを包み、彼らの目には見えなくなった。」とあります。ここも言っている雲は、天上にある雲ですが、気象上の雲以上の存在であり、栄光の雲です。聖書には、幕屋や神殿に雲で満ちたことが書かれています。そしてイスラエルの荒野の旅で、昼は雲の柱が立っています。これらはみな、神の栄光の現れです。

そして、主が天に上られる時に、雲の上に乗っておられるのです。「ダニ 7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。14 この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」このように、キリストが天において雲に乗ってこられて、それで父なる神から、主権と栄誉と国が与えられています。

主が、大祭司カヤパの前でこのことを語ったので、カヤパは衣を引き裂き、死刑だと叫んだのです。「マタ 26:64 あなたがたは今から後に、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」

2A 同じ姿で戻られる方 10-11

このような形で、主が昇天されたのは、あらゆる権威にまさる、父なる神の右の座に着くというこ

とを示しています。そして、この方が右の座において、父に私たちのために執り成すということもあります。さらに、ご自身が天におられることで、聖霊を父が遣わし、ご自身が肉体をもって地上を歩まれたそれ以上のことを、今、世界で行ってくださっていることを示しています。けれども、それは一時的なのだということです。この方が立ち上がって、地上に戻ってこられて、事実、世界を父の権威をもって支配の中に入れられます。改めて 10-11 節を見ます。

¹⁰ イエスが上って行かれるとき、使徒たちは天を見つめていた。すると見よ、白い衣を着た二人の人が、彼らのそばに立っていた。¹¹ そしてこう言った。「ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

ここの「白い衣を着た二人の人」は、御使いでありましょう。あるいは御使いのような霊的存在です。目に見える人の形で現れています。そして、励ましていますね。ずっと天を見上げているのではなく、しばらくとどまって、また戻ってこられるのですよと励ましています。さらに、同じ有様で、またおいでになると励ましています。ですから、しばらくの間、天にとどまっているだけです。これでお別れではないのですよ、ということです。

1B すべての者の見る再臨

ところで、偽キリストや偽預言者が現れて、惑わすことをイエス様が、オリーブ山にて弟子たちに警告されていました。「マタ 24:23-24 そのとき、だれかが『見よ、ここにキリストがいる』とか『そこにいる』とか言っても、信じてはいけません。²⁴ 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。」そして、さらにこう言われます。「24:26-27 ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。人の子の到来は、稲妻が東から出て西にひらめくのと一緒のようにして実現するのです。」

ここですね、稲妻が東から西にひらめくのと一緒のようにして実現する、ということ。言い方を変えると、すべての人が認めることができるということです。弟子たちが、今、イエスを見て、天に上られた時に、それをはっきりと目に見える形で認めることができました。同じように、はっきりとご自身が天から地上に戻ってこられるのを認めることができるということです。

2B エルサレムの回復

しかも、ここがオリーブ山の上であることを思い出してください(12 節)。同じような有様で戻られると言われた時に、それは同じオリーブ山に戻って来るという意味も含まれます。ゼカリヤ 14 章 4 節に、主が戻ってこられる姿が預言されています。「ゼカ 14:4 その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大

きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。」

この話を二人から来たあと、彼らはオリーブ山からエルサレムにある屋上の間に移りますが、ルカによる福音書においては、彼らは喜んでいたことが書かれています。「24:52-53 彼らはイエスを礼拝した後、大きな喜びとともにエルサレムに帰り、いつも宮にいて神をほめたたえていた。」大きな喜びがあり、神をほめたたえていました。それもそのはず、主が天に上られ、そこにとどまっているのは、一時的なもので、再び戻ってこられることを知ったからです。

私たち教会の人たちの姿勢がこれです。弟子たちと同じように、私たちも大きな喜びをもって、主にお会いすることを待ち望んでいるのです。「Iコリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。」顔と顔を合わせます。だから、パウロはコリント第一の手紙の最後で、自分の手で、こう書きました。「主を愛さない者はのろわれよ。主よ、来てください。(16:22)」